

富山県氷見市朝日貝塚見学会記録

金沢大学考古学研究室

はじめに

平成 26 年度の遺跡見学会は、氷見市朝日貝塚の見学を目的に計画した。その行程において、できるだけ多くの遺跡を見学することとした。結果的に以下の遺跡、博物館を見学することが出来た。

- 羽咋市吉崎・次場弥生公園
- 羽咋市歴史民族資料館
- 中能登町雨の宮能登王墓の館
- 能登国分寺
- 氷見市大境洞窟遺跡
- 氷見市朝日貝塚
- 氷見市市立博物館
- 氷見市柳田布尾山古墳

出発時の状況

平成 26 (2014) 年 11 月 8 日 (土) に実施された金沢大学考古学研究室バス旅行における出発までの経緯について見ていきたい。

今回の集合時刻は午前 8 時 20 分。先週の考古学大会で不覚にも迷子となり大幅に遅刻した身としてはここで遅刻を重ねる訳にはいかなかった。結局定刻ぎりぎりに到着。なお、定刻となった時点でバスに乗車していた参加者は以下の通りである。

考古学研究室

- ・教員：足立拓朗
- ・3 年：中村彩乃、原田空、野村将之



図 1 吉崎・次場遺跡

- ・2 年：大野朝日、小坂彩、星翔稀

この他、秦小麗先生と留学生の王冬冬さん、呂夢さん、フィールド文化学コースの虫明慧子さんが参加者である。

考古学研究室で定刻までに姿を現さなかった参加予定者のうち、3 年の橋本については数日前からの体調不良により欠席。残る 2 年の 2 人(浅田、大和田)については、それぞれ星、大野が連絡。浅田については体調不良により欠席との事。大和田については今から向かうとの事。理由については不明なものの、寝坊である可能性が非常に高いと思われる。その後、8 時 36 分頃に大和田が到着、8 時 37 分に無事出発となった。最終的な参加人数は 12 名であった。

ここでは補足として出発以前の車内の様子について触れておきたい。全体としては比較的静かであった。理由としては朝であったこと、車内に石川・富山両県の遺跡についてそれぞれ説明した本が回されていたことが考えられる。ただ、昨年と比べるとやはり静かな印象を受けた。

今回は口能登・氷見市の史跡を見学した。昨年は奥能登と、毎年個人では距離面などの事情によりなかなか見学できない箇所を見学できることがこのバス旅行の最大の利点と思われる。(野村)

羽咋市 吉崎・次場遺跡 (図 1)

吉崎・次場遺跡は、羽咋市で発見された弥生時代の遺跡である。現在は整備され、遺跡公園として保存されている。この公園を見学した際まず目に付くのが、復元された 2 つの平地式住居、1 つの高床式倉庫だろう。高床式倉庫は整備中だったため内部は見学できなかったが、住居のほうは内部に炉まで再現されており、当時の生活を想像させられる。また、公園には遺跡の概要、当時の自然、付近の遺跡など



図 2 雨の宮古墳群

の情報を説明するボードがいくつかあり、見学者が理解を深める助けをしてくれる。

この遺跡からは約 40 畳もの広さの住居址が見つかっており、また用水や排水のために設けられたと考えられる大溝は、長さ 70m にもなっていた。石斧程度の道具を用いて、それだけの仕事を成すには多くの人々が協力する必要があったことだろう。発掘される遺物からは、新潟や埼玉を産地とする石材を用いた石器も見つかっており、交流が示唆されている。当時かなり大きな村落であったことは想像に難くない。

遺跡公園としての作りも丁寧であると感じた。考古学に普段縁がない人も楽しめるのではないか。このような遺跡公園を見学することができ、非常に有意義であった。(大野)

雨の宮古墳群 (図 2)

雨の宮古墳群は午後に訪れた柳田布尾山古墳に勝るとも劣らない迫力があつた。1 号墳、2 号墳は能登地方を支配していた王の墓と考えられているだけあってとても大きかった。雨の宮能登王墓の館では職員の方から貴重なお話を聞くことができた。1 号墳については東から古墳を見ると人の顔のように見えるという職員の方の見解がとても興味深かった。人によっていろいろな捉え方があるのだと改めて感じた。また、「雨の宮古墳」という名前の由来が、「雨乞いの祈願をした」からだというのは印象的だった。素敵な名前だと思った。このバス旅行では、洞窟や国分寺跡など様々な遺跡を見学したが、やはり古墳はどの場所よりも神聖な感じがした。埋葬された人の当時誇っていた力が、そのまま古墳に閉じ込められているような気がするくらい、とにかくエネルギーを感じた。

今回のバス旅行は、多くの遺跡や博物館を訪れる



図 3 能登国分寺跡

ことができ、非常に有意義なものになったと思う。やはり実物を目の当たりにしなければわからないこともあると改めて思い知ったし、過去を生きただひとの生きた証が遺跡として多く遺されているのだと再認識した。また、個人的にでも遺跡や博物館巡りをしてみたいと思った。(星)

能登国分寺跡

能登国分寺について、能登国分寺跡、及び能登国分寺展示館でみたことをもとに能登国分寺についてまとめる。

能登国分寺は、843 年に能登国郡内の大興寺という寺を格上げして国分寺にしたのにはじまるとされている。現在では国指定史跡に指定されており、公園としても利用されている。また、石川県の能登で確認されている三つの廃寺うちの一つでもある。主に南門、金堂跡、塔跡、講堂跡、北門跡などから構成されている。それぞれ黒レンガで壁の位置が示されていた。この中でも南門は忠実に再現されており、軒丸瓦の復弁八葉蓮華文などが確認できた。

能登国分寺展示館では、主に能登国分寺遺跡で発掘されたものとそれに関係する遺跡の出土物及び文献資料が展示してあり、中でも瓦当などの瓦関係のものが多く展示されていた。また、七尾市の千野廃寺跡出土の軒丸瓦の展示もあり、これが能登国分寺と同じ型で作ったものであることがわかった。展示資料の中に、8 世紀前後に石見の瓦工人が能登半島へ移り住んだということが、発見された河原に使われている技法から明らかになった、という記事も展示してあつた。

実際に、当時の瓦を見ることができて大変勉強になった。能登国分寺の瓦に関する流通関係が気になった。反対に、能登半島の技法が石見などの地方に伝わっていないかも気になった。(小坂)



図 4 氷見市大境洞窟住居跡

氷見市大境洞窟住居跡

大境洞窟は富山県氷見市大境漁港のすぐ近くに位置する海食洞であり、縄文中期から中世までの六つの文化層が残されていることが確認されている。洞窟内の住居跡は日本で初めて洞窟遺跡として、1918年に東京帝国大学によって発掘調査が行われ国の史跡指定を受けた遺跡である。

各層の時代と出土品は以下のようになっている。

第六層：縄文中期から縄文後期にかけての層で、縄文土器や石器、カキ・サザエ等の貝殻が出土。

第五層：縄文晩期末から弥生中期中ごろの土器、石器、骨角器、貝殻、マグロ・イノシシ等の骨、人骨が出土。

第四層：弥生時代中期末から古墳時代初めごろの土器、動物の骨、人骨が出土しており、中でも弥生土器が多く赤く彩色されたものも見つかっている。

第三層：古墳中期から古墳後期の土師器、動物の骨を加工した槍先が出土しており、須恵器もわずかに含まれている。

第二層：奈良から平安の須恵器、土師器、製塩土器が出土しており、須恵器は灯明皿として使用されていたと考えられている。

第一層：中世の珠洲陶器、土師器皿、白磁皿が出土。

高さ 8m、幅 16m、奥行 34m というスケールに参加者は圧倒されつつ、古代から中世にわたる長い間使用されていたという歴史と人々の暮らしに思いをはせた。

(中村)

参考資料

大境洞窟設置看板

富山県デジタル文化財ミュージアム

<http://www.pref.toyama.jp/sections/3009/3007/digital/index2.html> (2014.11.15 閲覧)

氷見市朝日貝塚

朝日貝塚は富山県氷見市にある縄文時代前期から中期を中心とする遺跡で、1918年に東京帝国大学によって発掘調査が行われ、国指定遺跡となっている。また、北陸地方の縄文時代前期末葉の土器型式である朝日下層式の標式遺跡であり、通称バスケット型土器と呼ばれる非常に凝った装飾を施した土器などが出土した。この遺跡は日本で初めて確認された炉跡のある竪穴住居址としても有名で、現在は朝日貝塚の存在する寺院の一部を改築し、炉跡や柱の跡が見学できるようになっている。出土遺物はバスケット型土器など一部のものを除いては氷見市立博物館に展示されており、見ることができる。またこの博物館では朝日下層式土器の文様についても詳しい展示がなされているため、この時代を研究する者にとっては一見の価値のあるものであろう。

北陸地方で考古学を学ぶにあたってこのように考古学史上重要な遺跡に足を運ぶというのもなかなか感慨深いものであった。今後もこのような機会に積極的に参加していきたい。

(原田)



図5 氷見市朝日貝塚